

方太家子集

911.9
7



源朝臣鳳朗翁寂獎忌追福

俳

俳話 遲南未集

羽州 山形

門人

南 山送壽
席 洋枕嶺
朱 明蓬石
江 月青堰

去りけり人此日さうり守る家おは
るりもあら時梅りともあつるり
志さう山程むり志のまをさうり
のさあるハ沙中の弊おさうりとお
かきさうりのまをさうり月を
さうりのまをさうり風即志士のす三
田志年しあぬさうり子れ人追福
堂人少思ひ命もさうり事あり

り終へし志果さんとして先
居士の記念に句をも拾ひてうら
ふ四海兄弟に因てあはれ詠を撰
て連小一葉ありぬるは居士の
の厚きやいふに此海の厚きとお
叶ひては年よの志砂のあやめ
おぼるゝふ不朽の成事あはれ
先はしあやふし筆をとるゝ志うら

あはれ己年戊午中秋

五梅尾集用

あはれ己年戊午中秋



榮東画舎國書



四時

花本 爲朗

青明て日は譲りたり松ほら萩

ゆくのこ借来る言ひさし一郭公

光留のさけさほもあり霞れ中

氷仙や探のげ多葉もさそ飛もあ

追福席上俳諧連歌

桐樹院自然爲朗居士

あつくと小春の曠や松ちる

かよきよと 蠅の目を志身と小冬 送壽

舟川れ先をあらそよ 暈こめく 枕嶺

ひくこは今うまきも 氷あど 蓬谷

ゆきよはまのぼるある月明赤子 青崖

大輪よ成りく 踊るく 奉璣

社家思ひはしらばさなのちうそをささく

水竹

浮府前川下よたもむつのも

双岳

休らせよま打れうきんちる侍あり

素月

多にほれあめなを月口お粉

雪山

いもこの志ほむをまもほほなり

玉鷹

海そあなすてむし早き月

月悠

活魚けをなをさうくく浮あうめ

里曉

京のそきまのひんれよよ人

吃智

投げけし海風れ雲袋の上りあ

看龍

う袖ひてのらうそくたれある

鷗盟

あまの標よまげれ糸を結ひけて

自樂

ひある鹿よふのうきるあ

狐仙

涅槃會のほを静かな溪の寺

中龍

ひし菓子そくくともる筆

筆英

世並よあういせみある人ある

一蟹

けしも風らんけ白もくまらぬ

江流

一 秋の葉は花の如し	泉和
二 花の如きは秋の如し	坤一
三 秋の如きは花の如し	万未
四 花の如きは秋の如し	永川
五 秋の如きは花の如し	文陽
六 花の如きは秋の如し	甫哉
七 秋の如きは花の如し	祝瀾
八 花の如きは秋の如し	文子

秋 花の如きは花の如し	城山
花の如きは花の如し	春輔
花の如きは花の如し	水
花の如きは花の如し	静心
花の如きは花の如し	流水
花の如きは花の如し	菊花

右一册

手洗ふて一人の出る中を
青唯

梅をなみむうたをぬ相火桶
蓬谷

けふれ日やさも嬉しうゆり花
枕屋

おきやうの灯は立業のとき武
道壽

野はもたふりうとてぬ人なれ
はくし句をあげくともは日向の
梅

襟はれはてふ人多う柳を申
大梅

をすかすのあまの世なる枕のそね
八采

おのまゝよきさすまをる梅のな
紫山

おのののさるに鳥やもいれさな
護お

麦とす侍おれ幸よ入るきなを
日人

維子なうや目の出くくらむ山の獲
河嶋

なよそあくなくおからぬほり
柿室

ほろ多れきこのぬおもは袖を南
禾木

池よりの初志なきぬきりて
 草池
 あり海やりの月をいそぐほの月
 西月
 雲のけくくもよ新りく春水の露
 確嶺
 朱雀盟をくくきせや針多よ
 一具
 あまもあまをけけしあまの時をな
 乙二
 おれ拂くのそくきりゆる小春に
 蒼也
 志る松は酒流のれり夷 謙
 岱車
 雪のねのさくさく新れと電沙に
 風外

四時

晴天やう来いそとより 聖のさき
 舎用
 日の入ーあまも申よりとさるて兼
 多よ女
 にほひある雪木をかりぬおぼる月
 由誓
 水見るもくくよ日や種おんー
 鼎左
 雪消の雨一束ふる 陸月を
 尺外

のどろきも 志らふも 青のゆふぐら 為山

日さしめや 力のたらくぬが 集れねど 梅色

袖けふや 今木よるを 集のく 冬節

若舟や 産ちまふれ 常一なごら 可火

つまもみ 初まを 吐りよ 這入るり 芥舎

斗まをいし 見ふさの みる 新橋は 抱義

群をいさよ ばゆき 季室乃 ま次 水壺

山門の ぬきし せむ 也 偶とく 露す 浪言

むしかなんや せいの けい 湯女 辰 悠

いせしよ ちか 忍ふも 産を 播る 山家 京郎

ねば ちん ちや みる ね ちん ちん 未旦

に ちん ちん ちん ちん ちん 桐一葉 江三

海 菓 釣 の 志 ちん ちん ね ちん ちん 了知

七夕や 何と ちん ちん ちん ちん 而 后

名 月 の ちん ちん ちん ちん ちん 鳥 翁古

せう ちん ちん ちん ちん ちん ちん 松 付

とれ切て暮のほよなる林野に 遠淵

かけさく月あはれや山に 毎 等哉

鴨も暮はなまじく 目おやめを花 玄の子

入木のほもむれ々暮もちを 祖々

あさやうよおよそり妻よ冬れを 西馬

月と日れおふきのさく 雪の上 御風

春之部

よいらははるそれ勝なる木のの郷 仙舟 五雲

替りやいぼやもの灯れさ申さく 智夷

初めの桜よあけなれな ちんねんら 中二

人れやきく ころもさくさく 正月のな 郭高

このあをほものな手をもや初るれ 芳嶋

立いそくも わをれ ちんねんら 廣坡

おもひぬよさくらなるちやね保ん月 米花

かろしゆゆるきれ志とんや春の是 柳江

しをばすやあれりけくしとん 千波浦 月

伊られありゆく 中 仙遊

はちよゆえりや宙をたね 茂丸

日をあしれとあつるふとら 一翠

ゆえりゆく 萩中山 屯成

ま 米守 藍

志らぬやめ 目も 号珍

海ら 川井 月山

め 福海 千瓢

菟泉 汝松

遠島 荒砥 分お

小松 川大

字ら 大石田 思

大石田 思

大石田 思

静きやも風のしなるを人もり 若波 画 晓

山あふやるりは志平の印の香 石地 久 栄

ちんちんやあゝそらふきき あつ 月

燈籠よ 灯をいづくも春の香 五 蝶

あの花やもきみ 珠山 烟のほれをる 二 珠

まもらぬも 吉田 なりなり 玄 秀

けのまてのふつ 元木 して花 遊 月

一 二高正 月 芝

牙をうた 宗信

う の

蛾 李山

い 月悠

と 大石 其勇

と 矣 凡

揮 の 毎

平 松 三

ふるすくながひく枝ありいほくく吉川 警流

かげきくく面免くらや朝の梅右海 芹葉

茶々ありの中や鳥代通い道天童 文陽

いふくもに打く元せき御れ二五 二兆

内の雛さうせありく尼寺七五 宗管

きくやんやさくら七五 花右

うらさき歌くくりもやみあり六四 雪お

あめの月多うたきり尾山 鶴山

まもゆい日を揚ねらす日とり南後 五友

雛子あふや尼ねらほ海よ旭の井喜根 青峰

いしなももよつハハマのねく梅のそれ山形 野笑

さうらねて小こ急ななる茶つ三唄 雪ち

こまのりもももつにさく揚をさ 嗽石

あはれもまもらうけけ休屋の那 忍叶

花の戸前あてらる日永子 素懐

さなまねれささるいささか茶の 江海

うらやますや旭はききうりて松のこ
 珠山
 糸結やむきんていさるいさおきよ
 子山
 しくおののまゝいさぬほらわさつら
 小湊
 日のほらうらまうり落しく柳は
 川風
 おはきいしおあきよかしてあきつ春
 石鼎
 ちりよそていさおきえおきやうの畑
 高石
 されけう眼のまゆ印のまの海
 万本
 おきのやうや團うちやも揚らるり
 糸川

文の教

仙舟

三ほやそよえほよまのいさくせえ人
 宗古
 やまおよのたえれ愛さる清水が
 又人
 川をそら田けく急やうれ連なり
 南山
 まくいあのかうかえおれ一時多
 常め
 風さうとまきやまのくまふ船魂が
 安女

一 晴 天 水 清 如 畫 柳 絲 拂 水 綠 如 絨

二 綠 柳 垂 金 線 紅 杏 出 青 簾

三 白 雲 浮 碧 嶺 紅 日 照 蒼 巖

四 遠 上 寒 山 石 色 蒼 蒼 古 木 蒼 蒼

五 橫 看 崑 崙 雪 滿 頭 側 看 別 自 是 銀 頭

六 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

七 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

八 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

九 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十一 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十二 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十三 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十四 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十五 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

十六 五 湖 水 向 東 流 六 湖 水 向 西 流

落月減勢よさる信をたかくせゆく 東松 晚山

志よの戸よむらゐあはせや百合の花 東井

川端のよ柳よまはしくもさうらひなり 沼木 長寿

すゝゝをぬぬむらけり 橋の先 波月

けいふ疑あらしく 平長水 耻川

川かりやうらよ 岩浪 耳雪

泊針のいとをいさるや 志田 玄岱山

ぢぢ モトキ 清水

るも水々 蝶の音言 一決本立 太湖

ちらぬさみ 山形 文子

糸子 椿南

そり 智山

溜水 梅園

一 榎辰

原中 辛山

ち 万来

中おまよ一艶もらぬ畑れまの 梅葉

藤うらや田植志まひ一青れ菊 洋芦

おまよう次よま一まておれまよら 玉瓢

城よ来言一庭あらたまる 梅 水月

ほきま精ま履まきうくならよけり 如柳

冷麦れ中よまのそらなり 水れ音 叙好

むきふまよまの乾くくえ清氷れ 梅林

雨やどろし〜黄ひかりかよつを 志月

佛名もも廻るかやりれまありうな 並雨

人かづれのをやまの麻の子れ月ま籠 梅幹

川裾よふえれ音ゆつ〜夏の月 素柳

美ゆわもほらよ念なり一梅れ菊 梅葉

今このまれさ木れ音や蝶の夢 其蝶

朝の光をまら〜松の衾の音 其雪

交れ月松よのうら〜おぬまよ 玉扇

か〜ほらや樹まをれて夕かせま 叶山

夜氷のくせもこころの交の月 竹雨

魚花のくせも紫の蓮けり中茶の 仙羽

風をこれもやまぬあややほづもは 芳翠

月よりもるるまゝのゆるぎも 梅風

一境の静けさも 連山

さよふまゝの上も下もけり 皆風

洋平のくせも 朝霞

入梅のくせも 曉鐘

いふ紙のくせも 鷗盟

あをくせも 一

まをくせも 里曉

涼風のくせも 自樂

提のくせも 琥珀

意拂のくせも 観深

秋の詠

夕葉よみらふもまよふ紅葉の風

仙府

鬼白

きこえゆるる灯よまきく写りきり火

彫榮

草よ舞志つきてじりのおめが

竹友

四五枚の田よいのみよかきり

魯人

嵐展よよぐく日のあきくる木下江

亀屋女

空ハそら日まひよるそそく秋の風

白知

いづ起しかほや志益のなまよふま

住好

ねもまるとふゆのけりや居の志免

芝園

身代涼よおちゆる秋のうさそそ那

舟丘

竹分

いづらあよまそ道にふる辰ふうな

萩中山

嘉笠

木はきわからくまふめを松ゆへ

米澤

号二

そこのめくはいてまける角の就

友泉

こめ女

いづるものまぬれまつら

松原

双叶

菊のほや葉をこけり人れ来る

小出

茶丘

あまのわかや露の光りもそそるらん

流尾

四方うらををせりあてそはの衣ニカニ子 南哉

あまのきやまきするちよ月ゆり尾出得 藤鏡

移はまたつとつもの水れおき 素虬

じーのねをきくぞうし終藤入岩浪 多玉

栗せあやうまむ々相入 紡漣の光之木 流水

敷ありく野のいんさびく女大石田 花 丘 雨

いんはく文の自ぬきぬころサカエ 月 嵐

川止し沼木 にもかざる 雀也籠 深 教

志ら菊も草きくも同し月おき 逆海

^{廻り} 舞言も雁の人や美 烟 茅山形 既 醉

とがしにけ焼いまをり秋の嶮 郭 么

野ふしそ平らになりぬ溪の夕 一 笑

野ま出れをまゝ入者あり音の月 松 月

日えらしやまきしちつせし一あり 鶴 怨

老ゆのやえらしもころきびら家 燕 抱

とせをい葉やものまよしねる音の音 禱 糸

風きておののあふくし 写りての秋 方居

火をてのりたよし 稲きく白ひけ 千雀

かきしらぬあまも 相のいとあまね 一總

田の家ねきし つかくむらさきもな 赤松

芝がくちやあまののあらけ 御あり 八重女

杉の枝よきくちあまのつらむし 霞居

志らまのくちあまのつらむし 湯水

眼のまきくちあまのつらむし 菊のむ 梅々

釣草けそあまのつらむし けきの秋 泉和

こもゆいのまきくちあまのつらむし 静山

障らんで戸をひく 極の切籠 着就

名月けそあまのつらむし 白の白 河蒼

子れあまのつらむし 白の白の白 一晴

冬の部

神宮やまのつらむし 庭の草 江二

仙府

津島に奥の門の灯の菴柳美

張るに板橋を小春に水車市曉

の岸に坂の如くは白の月江

者の灯に水に流る湖産

ちの山に小池に水に流る嶽中崖

猫の如くは水に流る崇波掛山

鏡に映るに水に流る根岸月窓

の如くは水に流るの池に之の如く

二番 高の山に水に流るの那奇力朵峰

二の口道に水に流るの如く菟泉盤亀

の如くは水に流るの如く了了洗音

二人の如くは水に流るの如く小松星橋

の如くは水に流るの如く長井岩月

の如くは水に流るの如く深山赤塚

の如くは水に流るの如く天臺双岳

の如くは水に流るの如く如圓

星の夜に寄る 尾根

在りて 元木

煉柳 ナリ 高雪

初習 出形

小春日 一日之中 愈心

格 格 甲之

光 光 晴嵐

用 用 毒曉

秋霜 秋霜 孝補

中 中 銀月

松 松 若松

水 水 旭峰

志 志 破鏡

求 求 我

求 求 我

求 求 我

そは折やそつと切出はなまじり淡 春在

椽々きくくしるるおぼや小春雪 子云

湯よりけしき信なききく一年はれ 旭峯

翁忘やふ世志きくき物うまより 宝英

沁る湯のもやるおぼやや喜れ舞 中龍

旭うきくくしるるおぼや暖く鳥 忍仙

石蕨のきくよおのきくせむ時節が 雲水 朱海

音らきくき灯もなききくき 左 の山はきくき 一雨

四季

それやふ志のめはくるきくうれ 千原浦 任阿

日くくくとんきくかけのく鹿も心 持石

おのきくきくきくきくきくきく 江崎

きくきくや川にまじりよのふもあや 喜白

あきくくくくくくくくくくくく 茂林

きくきくきくくくくくくくくく 南行

根をきくくく水はなきある柳うき 月圃

おとこまふはらぬく朝のありし 朝露

鏡影へあせを靴うけ衣掛う籠 曾由

さぐれをぬきふさぐや葉のをれ 具麻

あつさゆいもてうれしき涼の事 三本木 年明

洞窟よ水にれたる跡星の籠 宿重

をれなる月のあきらや輝の光 司教

海やむやになや風もつま向うな 文和

あまのけや雨をきくじほ水なる 天標

なや〜とや〜からあるさの色 こと女

水を月や月もつれはあも涼し 天標

日は雲をさけしてほのるや秋の風 芳山

おかしらひきてかたね木様乳 可伸

田のさる〜く様さるや田下りる 柳圃

むらさし人なれたるは後さる 柳圃

そよよ〜とよをぬく〜 菅註

菅註

際立てきりり〜回れ〜ら〜ら
大勢をば〜り〜り〜り〜り
波月 芥中

新あゝのきこよ〜り〜り
古川 竹洞

多ゆゑいの水よ〜り〜り
花耕

川野の一番きりり〜り
胡定

水くら〜り〜り〜り
中子

ゆ〜り秋やき〜り〜り
春人

梅のむ時やきりり〜り
止琴

白蓮のはゆあ〜り〜り
中良

手を休て門の〜り〜り
巴燕

名月やほの〜り〜り
耳トリ 天紹

梅きりり〜り〜り
中新田 一哉

もつるや〜り〜り
ヨシオカ 五葉

仙城南

心女も様を〜り〜り
大カハラ 三揖

海つらるるをこぼしほやを花火 舟オカ 一斗

重此舟とせりもきくこころより アラハ 毒人

馬あつらふもつらりけつら ツヤキ 詠柳

あまもつらもの程 ワタリ 左竹

葉もも眼も ワルビ 梅来

あつらふも カクダ 東可

あつらふも カクダ 東可

あつらふも カクダ 東可

あつらふも カクダ 東可

あつらふも カクダ 東可

補助を磯ぬ カクダ 東可

けふは幸ひ カクダ 東可

ハ巻末 カクダ 東可

らつら カクダ 東可

あつらふも カクダ 東可

あつらふも カクダ 東可

必しとてなる白湯わたりし並

そとよみたる日水き松葉籠

言士も杖の凍をらるるあふ

神のすくねおまなつる涅槃像

七葉れもまに清きりらす

川ぬれほらるる若きなり

道もすくなくもがすくもいぬ

言くも羊よいらるる歩黄深

秋ちりそむる砂のゆふせ

床なうも指おりの月見を

摺紙をちよあける新束

夢のいれいもはくも奥回者

そくすくすのちよも手拭

虹れ輪の花よさをらるる消うり

はまももほらるる伸る枸杞の芽

丁畧

半実のいるや晩梅のむねくら

補助

奉 璩

いららぬ松ののけりや江の海

春 唯

きほとよし竹を杖とよむ

蓬 石

山焼れあけけらるや江の海

枕 巖

い敷おれまきとらうせの夜はあはれ

送 壽

世の中は父母に恩をおよて、師に恩ほ

とるのまのなす、おにきいふは、少風即と

いふ人あり、其道よいきなりそ、うそをい

くともあま、いはい、く名さ、か、あ、ま、ん、る

け、る、ま、あ、る、あ、ら、う、り、と、建、月、う、ま、ま、り、と、わ

せ、の、海、あ、ら、う、り、と、建、月、う、ま、ま、り、と、わ

き、ま、あ、る、あ、ら、う、り、と、建、月、う、ま、ま、り、と、わ

め、る、あ、ら、う、り、と、建、月、う、ま、ま、り、と、わ

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged, stained paper. The text is mirrored across the page, suggesting it was written on the reverse side and bled through. The ink is dark, and the paper shows significant water damage and discoloration.

良普
持用



身
普
林
田

